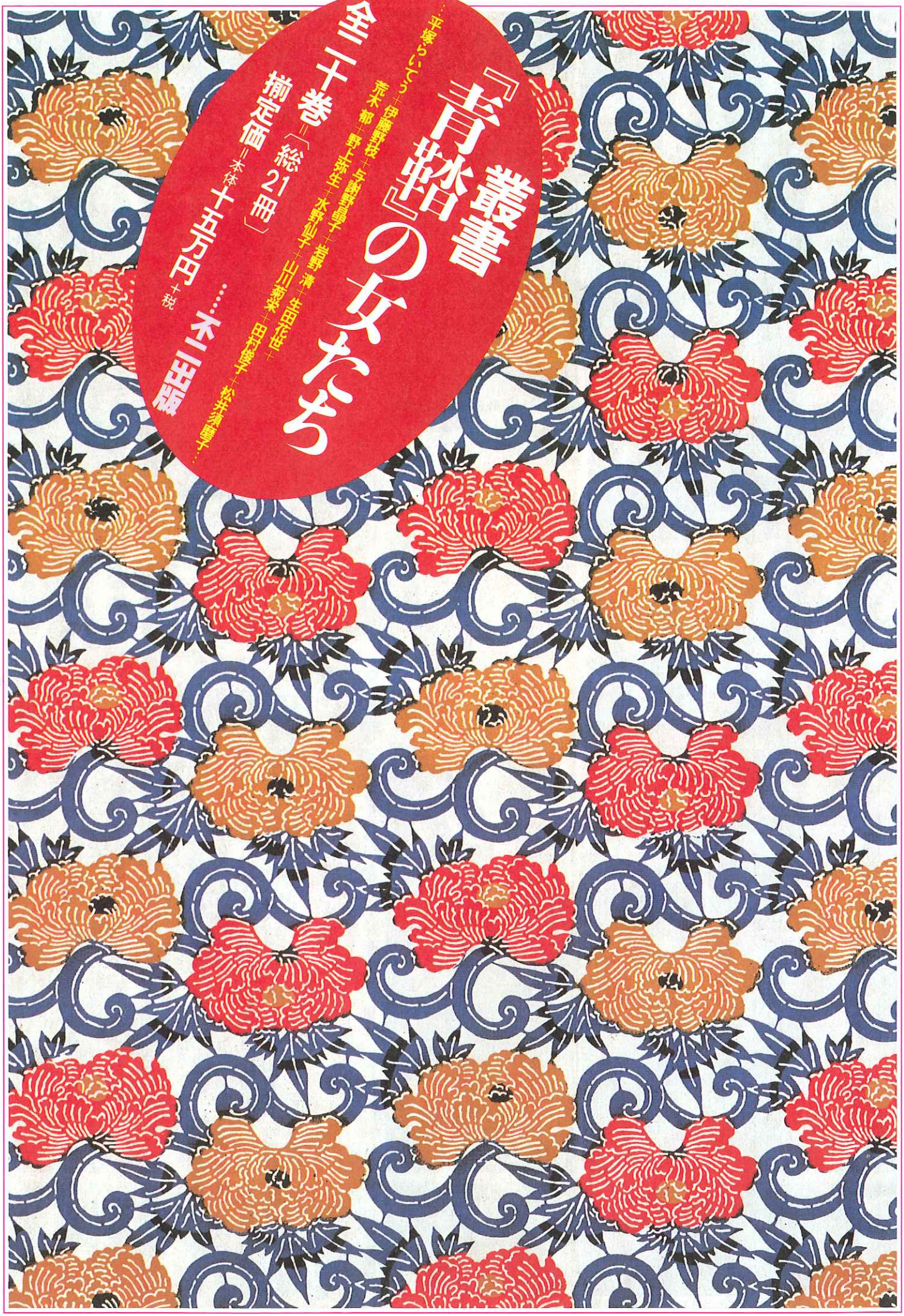

叢書
『青鞜』の女たち
全二十巻〔総21冊〕
揃定価＝本体十五万円＋税
……本日発売
……平塚らいてう＋伊藤野枝＋与謝野晶子＋瀬戸清＋生田花世＋
荒木郁＋野上弥生＋水野仙子＋山田嫩子＋田村俊子＋松井須磨子……

叢書『青鞜』の女たち 刊行にあたって

歴史における女性の不在が問われて久しい。近代史研究においても、今やあらゆる分野で女性史は「忘れられてきた歴史」として注目され深い堀り下げが必要とされてきている。

とくに大正期以後の研究は、ようやくその端緒についたばかりであり、近代的自我の解放の先駆となった雑誌『青鞜』に関しては、その誌名とそ人々の知られるところとなっているが、本格的なアプローチは一部でしかなされておらず、とくに同人ひとりひとりへの研究は一、二の人物に限られているのが現状である。

また同時代に生き近代的自我に目覚めた先覚者たちは、ひとり『青鞜』同人のみに限らない。多かれ少なかれ『青鞜』に影響を受け、大正デモクラシーの嵐の中で、目覚めた自我を、それぞれの分野で咲かせようとした同時代の女たちは少なくない。しかし、彼女たちを知る手掛りもまた非常に限られているのが現状である。それは「女」が社会の表舞台から遠ざけられていたため、その表現手段のひとつである自身の著作が少ないこと、そして今やその著作自体が埋もれてしまい容易に手にすることができないことなどが大きな原因となっている。

こうした状況を鑑み、小社では、近代史の谷間に埋もれた女たちの主要著書を取り上げ、個個に解説を加え再び世に呈するものである。このたびの復刻では、『青鞜』とその同時代の女たちの著書の中から、当時の彼女たちの思想と行動を端的に表わしている代表的著作を二〇点選び「叢書『青鞜』の女たち」とした。

世間やジャーナリズムから徹底的に非難された「新しい女」たちの女性解放論、近代的恋愛に悩む情熱の吐露、目覚めたがゆえの苦悩等々……。ここに集められた著作物は、いずれも他によって説かれる「婦人の道」「恋愛論」ではない。女たち自身が模索した、ときには高らかな、ときには命を切り裂くような自我解放への声の集積である。本叢書が、近代女性史研究の一大宝庫であるとともに、従来の近代史・文学史研究に新たな示唆を与える資料として、広く活用されることを願うものである。

——不二出版

❶

❷

❸

❶—雑誌『青鞜』創刊号表紙、一九一一年九月、長沼千恵子・画

❷—茅ヶ崎南湖院で生田長江を囲んだ(左から)荒木郁、保持研子、平塚らいてう、尾竹一枝ら 『青鞜』一九一二年九月号より

❸—岩野清宅での青鞜関係者の新年会 (左から)小林哥津、岩野清、中野初、荒木郁、保持研子、平塚らいてう 『青鞜』一九一四年二月号より

❹—伊藤野枝と大杉栄

❺—尾竹一枝とその姉妹たち

❻—山川菊栄(中央)と女子英学塾の友人

❹

❺

❻

『青鞜』の女たち 全二十巻 叢書

	著者	書名	刊行年・体裁	解説
❶	平塚らいてう	円窓より	一九一三年 四六判並製三三六頁	永畑道子
❷	伊藤野枝	乞食の名誉	一九二〇年 四六判並製二三四頁	長谷川啓
❸	与謝野晶子	激動の中を行く	一九一九年 四六判上製二六〇頁	渡邊澄子
❹	岩野 清	愛の争闘	一九一五年 四六判上製五三八頁	尾形明子
❺	生田花世	燃ゆる頭	一九二九年 四六判上製三四四頁	和田艶子
❻	荒木 郁	火の娘	一九一四年 菊半判上製二六六頁	井手文子
❼	青鞜社同人	青鞜小説集	一九一三年 四六判上製三八〇頁	利根川裕
❽	神近市子	引かれものの唄	一九一七年 四六判上製四一四頁	瀬戸内寂聴
❾	長谷川時雨	美人伝	一九一八年 四六判上製六五八頁	和泉あき
❿	水野仙子	水野仙子集	一九二〇年 四六判上製五三二頁	尾形明子
⓫	山川菊栄	婦人問題と婦人運動	一九二五年 四六判上製二〇〇頁	鈴木裕子
⓬	上野葉子	葉子全集 全二冊	一九二八年 四六判上製一〇六四頁	渡邊澄子
⓭	山田わか	女・人・母	一九一九年 四六判上製三六四頁	香内信子
⓮	田村俊子	木乃伊の口紅	一九一三年 四六判上製三七八頁	瀬戸内寂聴
⓯	木村駒子ほか	新らしき女の行くべき道	一九一三年 四六判並製一六八頁	石原通子
⓰	西川文子	婦人解放論	一九一四年 菊判上製三〇六頁	天野 茂
⓱	中平文子	女のくせに	一九一六年 四六判並製三一〇頁	江刺昭子
⓲	松井須磨子	牡丹刷毛	一九一四年 菊半判上製二三六頁	松本克平
⓳	三宅やす子	未亡人論	一九二三年 四六判上製三七八頁	和泉あき
⓴	鷹野つぎ	悲しき配分	一九二二年 四六判上製三五二頁	市原正恵

平塚らいてう『円窓より』

●**円窓より**　一九一三（大正二）年五月刊。東雲堂書店発行。装幀・尾竹一枝。

『青鞜』の主宰者である平塚らいてう最初の著書。『青鞜』創刊の辞で、女性の自我の目覚めを高らかにうたった「元始女性は太陽であった」を初めとする、この時代の彼女の代表的感想・評論を所収。『青鞜』の絶頂期であると同時に、ジャーナリズム・官憲等による「新しい女」攻撃の激しい時期に出版され、刊行後ただちに発禁。のち、発禁の対象となった「世の婦人達に」を除いて『局ある窓にて』と改題されて改版された。

＜**内容**＞元始女性は太陽であった／読んだ「マグダ」／ノラさんに／女としての樋口一葉／見よ、女の眼を／新しい女／世の婦人達に／高原の秋　ほか全一六編

●**平塚らいてう**　本名・明子。一八八六（明治一九）年、東京麹町区で生まれる。一九〇八年三月、森田草平と死を期して塩原の雪の山中へ赴き、世にいう「塩原心中未遂事件」をおこす。一九一一年九月、女流文芸誌『青鞜』を発刊。一九一五年、『青鞜』の発行権を伊藤野枝に譲るが、『青鞜』時代に学び始めたエレン・ケイの母性主義に一層接近し、一九一八年には与謝野晶子、山川菊栄、山田わかと「母性保護論争」をおこす。一九二〇年、市川房枝らと新婦人協会を結成、機関誌『女性同盟』を発行。一九三〇年には高群逸枝らの無産婦人芸術連盟に参加、機関誌『婦人戦線』の同人となる。第二次世界大戦後は、平和運動と婦人運動に携わる。一九七一年没。八五歳。

●解説＝永畑道子（作家）

伊藤野枝『乞食の名誉』

『青鞜』叢書　内容紹介

●**乞食の名誉**　一九二〇（大正九）年五月刊。聚英閣発行。

伊藤野枝の短い生涯のなかで出版された三冊の著書のうちのひとつ。大杉栄との共著。親のとりきめた結婚を拒絶して出奔し、辻潤のもとに飛びこみながら、そこでの封建的家族制度との矛盾に悩むという自身の体験に根ざした小品三編を収録。いずれも女性解放運動、無産者運動に携わりながら、現実生活の上にのしかかる旧い社会制度と自己の内部の旧い習俗と闘い、解放をめざした野枝ならではの力作。

＜**内容**＞序／死灰の中から（以上大杉栄）／転機／惑ひ／乞食の名誉（以上伊藤野枝）

●**伊藤野枝**　一八九五（明治二八）年、福岡県糸島郡に生まれる。一九〇九年、上京して上野高等女学校に入学、辻潤と知り合う。一九一二年出奔して辻と同棲。このころ青鞜社に通い始め、一九一五年一月には『青鞜』の編集をらいてうから譲りうけるが、翌年二月『青鞜』は廃刊。同じ頃、大杉栄と恋愛関係に入り、いわゆる「葉山日蔭茶屋事件」をひきおこす。らいてうは自伝の中で「『日蔭茶屋事件』が好むと好まざるとにかかわらず、わたくしたちの『青鞜』への挽歌であった」と述懐している。恋の勝利者となった野枝は翌年大杉とともに亀戸に移り、『文盟批評』を創刊。以後死ぬまで大杉と執筆活動を続ける。

一九二三年九月一六日、関東大震災の直後、大杉、甥の橘宗一とともに憲兵隊に拉致され、甘粕正彦大尉により虐殺される。二八歳。

●解説＝長谷川啓（城西大学女子短期大学部教授）

与謝野晶子『激動の中を行く』

●**激動の中を行く**　一九一九（大正八）年八月刊。アルス発行。装幀・山本鼎。

名実ともに歌壇の女王である与謝野晶子が、明治末年から昭和初年にかけて、特に大正デモクラシーピーク時に集中して書いた二五冊の感想・評論集のなかでも出色のもの。自由恋愛を貫き、一一子を育てながら、筆一本で家計を支えるという、そのバイタリティ溢れる生に基づいた女性解放論は、社会・教育問題を含めたラジカルな発言となっている。

＜**内容**＞激動の中を行く／婦人改造の基礎的考察／教育の民主主義化を要求す／私達労働婦人の理想／女子の智力を高めよ／女子も参政権を要求す／男子も先づ「人」となれ　ほか二一編所収。

●**与謝野晶子**　旧姓・鳳、本名・しやう。一八七八（明治一一）年、大阪府堺市に生れる。堺女子学校補習科卒業。堺敷島会に入会後、関西青年文学会に入り『よしあし草』に、東京新詩社創設とともに入会し、『明星』に詩歌を寄せる。一九〇〇年西下した与謝野寛（鉄幹）と会い、激しい恋愛に発展。翌年家を捨てて上京、画期的な初の女性新派歌集『みだれ髪』を上梓、その鮮烈な自我の詩は大反響を呼び、たちまちスターの座に上る。一九〇四年、日露戦争下に発表した「君死にたまふことなかれ」は、痛烈な天皇批判の詩と解釈されて物議をかもす。一九一一年の『青鞜』創刊号巻頭詩「そぞろごと」は、らいてうの「元始、女性は太陽であった」と対応した記念碑的作品。歌や評論の他に『源氏物語』を初めとする古典の現代語訳等の業績も見逃せない。家庭の経済もわが肩に負い、一一子を生み育てた超人的活躍は瞠目される。一九四二年没。六三歳。

●解説＝渡邊澄子（大東文化大学名誉教授）

岩野　清『愛の争闘』

●**愛の争闘**　一九一五（大正四）年一一月刊。米倉書店発行。序・田中王堂、生田長江、平塚らいてう。

『青鞜』にすぐれた女性解放論を展開する以前から、女性の政治参加を求める運動家として活躍していた岩野清が残した唯一の著書。「霊が勝つか、肉が勝つか」とジャーナリズムに揶揄されながら始まった極端な恋愛神聖論者＝清と、半獣主義の実行家＝岩野泡鳴の六年間にわたる同棲・結婚生活は、互いの性と愛に対する認識の相違がついに乗り越えられることなく破綻する。本書は、泡鳴との別居に際して、それまでの二人の同棲生活を日記の形式で綴った赤裸々な告白である。

＜**内容**＞序／大久保日記／池田日記／果鴨日記

●**岩野清**　本名・遠藤清子。一八八二（明治一五）年、東京芝高輪に生まれる。鉄道局、電報通信社を経たのち、人民新聞社、雑誌社等の記者を勤める一方、女性の政治参加を一切禁じた治安警察法第五条改正のための請願運動に参加。一九〇九年夏、妻ある愛人との関係に絶望し、国府津の海に入水するが、未遂に終わる。同年冬、特異な自然主義作家として知られる岩野泡鳴を知り、一九一三年に結婚。しかし、青鞜社員・蒲原英枝と泡鳴との恋愛関係を直接のきっかけとして、一九一五年八月離婚する。遠藤姓に戻った清は、一九一七年二月の離婚成立後、洋画家を志す遠藤達之助と同棲。細々と執筆を続けるかたわら、一九二〇年三月、平塚らいてう、市川房枝らの新婦人協会に参加、女性の政治参加と未成年者の労働の保護を訴えた。

一九二〇年一二月一八日、達之助の故郷である京都にて病死。三九歳。

●解説＝尾形明子（東京女学館大学教授）

生田花世『燃ゆる頭』

●**燃ゆる頭**　一九二九（昭和四）年四月刊。中西書房発行。装幀・生田春月。序文・神近市子、長谷川時雨、今井邦子。

『青鞜』同人の中でも地方出身の苦労人として異色の存在であった生田花世の三冊目の著書。『女子文壇』『青鞜』『女人芸術』等を舞台に文筆家として着着と歩んできた花世の面目を窺わせる短編集。とくに「獅子は抗しがたし」は、「或る妻が夫の上げたる生活の烽火に対して動揺し、応戦するものであり、生活を又もとの平安にとりかへさうとする努力の女秘記」（自序）であり、夫（春月）の愛人問題に煩悶する妻の心情を描いた、花世の代表作のひとつ。

＜**内容**＞燃ゆる頭／浅草の鐘／桜の町／面会人の顔／早春／獅子は抗しがたし／三角関係の一端より　ほか全二〇編。

●**生田花世**　旧姓・西崎。一八八八（明治二一）年、徳島県板野郡に生まれる。徳島県立高女卒業後、小学校教師を勤めるかたわら、横瀬夜雨に師事、『女子文壇』に長曾我部菊子の筆名で散文や詩を発表。上京し、小学校教師、『女子文壇』の記者等を勤め、一九一三年、青鞜社に入社。とくにらいてうから野枝に主宰が移った『青鞜』後期には、野枝をよく助けて編集に携わり、また安田皐月と「貞操論争」を巻き起こした。翌年『青鞜』に載った一文がきっかけで、詩人・生田春月と恋愛、結婚。一九一六年には今井邦子らと女流文芸雑誌『ビアトリス』を創刊。その後も文筆活動を続ける一方、春月の愛人関係に悩む。一九三〇年、春月自殺。戦後「生田源氏の会」を開き、以後一〇年余各地で『源氏物語』を語った。一九七〇年没。八二歳。

●解説＝和田艶子（昭和女子大学理事・故人）

荒木　郁『火の娘』

●**火の娘**　一九一四（大正三）年二月刊。尚文堂書店発行。装幀・尾竹一枝。題詞・森鷗外。

通称・文学おかみの荒木郁がその生涯で残しただひとつの書。創刊当初から『青鞜』とかかわっていた郁が、『青鞜』第二巻第四号に掲載した「手紙」は、人妻が妻の立場の偽瞞と虚無を恋人宛てに書き連ねね、かつ密会を求めるという短編だが、これによって『青鞜』は初めての発禁処分を受ける。この「手紙」は若干手直しされ、「道しるべ」と改題されて本書に収録されている。

どの作品も彼女の情熱と生活意識が反映されていて興味深い。

＜**内容**＞火の娘／春の歌／道しるべ／道子／父

●**荒木郁**　一八九〇（明治二三）年、東京に生まれる。日白坂上で下宿兼旅館をきりもりしているころ、『青鞜』発起人のひとりである保持研子と知り合い、『青鞜』に参加する。恋愛関係の多彩な郁は、吉原登楼事件、五色の酒事件とともに、ジャーナリズムの「新しい女」攻撃の的ともなったが、経済力のある苦労人・生活人でもあり、『青鞜』を裏方で支えたひとりであった。のち、日白坂上の下宿屋をたたんで、母が経営していた神田の旅館・玉名館へ移る。そこには、青鞜社の女たちのほかに相馬御風、本間久雄、徳田秋声、宮崎民蔵・寅蔵（滔天）兄弟、中国やフィリピンの革命志士などが出入し、郁の交流の広さと多彩さがしのばれる。

一九四三年、肺炎で死亡。五三歳。

●解説＝井手文子（女性史研究家・故人）

青鞜社同人『青鞜小説集』

●**青鞜小説集**　一九一三（大正二）年二月刊。東雲堂発行。装幀・小笠原さだ。はしがき・平塚らいてう。

女流文芸雑誌として出発した『青鞜』が世に「新しい女」として注目され始めた頃、創刊から一年余の間に掲載された小説から佳作・一八作品（一八名）を選んだもの。

＜**内容**＞京之助の居睡（野上弥生、一八八五～一九八五年。大分県生まれ。『真知子』『迷路』ほか著書多数）／客（小笠原さだ、一八八七～一九八八年）／女医の話（水野仙）／太鼓の音（小金井きみ、一八七〇～一九五六年。津和野生まれ。兄は森鷗外）／道子（荒木郁）／老（尾島菊、一八八四～一九五六年。富山市生まれ。のちに小寺姓。徳田秋声に師事。著書『頬紅』など）／おきな（加藤籌、一八八三～一九五六年。豊橋生まれ。夫は小栗風葉）／教会と魔術と鳥と（人見直、生没年未詳）／暗闇（岩野清）／かをり（岡田八千代、一八八三～一九六二年。広島市生まれ。旧姓・小山内。筆名・芹影、芹影女、伊達虫子。兄は小山内薫。夫は画家・岡田三郎助。著書『門の草』など）／人の夫（神崎恒、一八九〇～一九七五年。佐賀市生まれ）／手紙の一つ（神近市）／死の家（森しげ、一八八〇～一九三六年。東京生まれ。夫は森鷗外）／乙弥と兄（林千歳、一八八九～一九六二年。東京生まれ。女優としても活躍）／執着（加藤緑、一八八八～一九二二年。長野県生まれ）／湖畔の夏（茅野雅、一八八〇～一九四六年。大阪道修町生まれ。旧姓・増田。与謝野晶子、山川登美子との共著歌集『恋衣』がある）／初恋（藤岡一枝、一八八八～一九七九年。東京生まれ。本名・物集和子。青鞜社は最初のころ彼女の広大な邸の一室におかれた）／老師（木内錠、一八八七～一九一九年。東京生まれ）＊印は別項参照

●解説＝利根川裕（作家）

神近市子『引かれものの唄』

●**引かれものの唄**　一九一七（大正六）年一〇月刊。法木書店発行。

女子英学塾在学中から榊纓のペンネームで『青鞜』に寄稿していた神近市子は、新聞記者時代、社会主義者・無政府主義者と交わり、大杉栄と出会い恋におちるが、妻ある大杉との恋愛関係は伊藤野枝も加わって泥沼化する。この四角関係は、大杉の「フリー・ラヴ理論」に最も翻弄された市子が、大杉を刺傷するという「葉山日蔭茶屋事件」（一九一六年一一月）によって結着をみる。本書は未決囚として四ケ月間拘束されたのち、裁判で二年の懲役が確定した市子が、入所までの間に書き綴ったもの。事件前後の市子の心情を吐露した手記として、戦後に青春時代を回顧したものとは異なったリアリティがある。

●**神近市子**　一八八八（明治二一）年、長崎県小浦に生まれる。長崎市の活水女学校を中退、女子英学塾に入学。一九一二年青鞜社に入社するが、「新しい女」と揶揄されていた青鞜社員であることを知った塾長・津田梅子により、退社させられる。卒業後の赴任先弘前でも同じ問題で免職。一九一四年、青鞜社時代の友人・尾竹一枝と共に文芸芸術雑誌『番紅花』を創刊。同年東京日日新聞社に入社。このころ大杉栄を知り、恋愛関係に入るが、一九一六年「日蔭茶屋事件」を招き破綻。出獄後、評論家・鈴木厚と結ばれる。一九二八年『女人芸術』の創刊、自らの主宰による一九三五年の『婦人文芸』の創刊に際し、執筆・編集に大いに文学的情熱を傾ける。戦後は衆議院議員に当選し、一九六九年引退するまで女性解放、人権擁護の活動を続けた。

一九八一年没。九三歳。

●解説＝瀬戸内寂聴（作家）

必要かつ新鮮な企画

瀬戸内寂聴（作家）

最近また『青鞜』が見直されてきていて、若い人たちが『青鞜』を読み直しているし、外国の女性で日本文学を研究している人が、やはり『青鞜』に興味を示し、らいてう論などを熱心にやっている。

なぜなのか。日本の近代化が進むと共に、女性の地位が男性の足並と共に歩む筈なのに、それがこの国では果されず、戦後棚ぼた式に入手した女性解放や男女同権の立場が消化しきれなかったからであろう。

戦後五〇年たっても、依然としてまだわが国は男性中心の社会であり、男女の差別は厳然として残っている。働く女、自己を成長させたい女、結婚で自分を埋没させてしまいたくない女、自己の才能の可能性を極限まで試してみたい女等々にとっては、まだまだ生き難い因習の尾骶骨を残した社会であり、職場での男の嫉妬に取り囲まれている。

今更のように、女に生れたことの意味と、女であることのプラスマイナスを再検討したいと思う時、かつて『青鞜』の時代に生きたひとりひとりの女たちの生活と心の闘いを見直したくなってくる。かけがえのない個性と、才能と、熱い情熱と、生きる歓びを貪欲に需めつづけた彼女たちの全貌が、今ここによみがえり、いきいきと若い女性たちに語りかけるのは喜ばしいことである。必要かつ新鮮な企画に心からなる拍手を送ってやまない。

真の男女共同参画社会のために

羽田澄子（記録映画作家／『元始、女性は太陽であった　平塚らいてうの生涯』監督）

『青鞜』の「元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。」という発刊の言葉を私が知ったのは、戦後のことである。戦中派の世代だから日本に女性解放運動があったことすら知らされていなかった。「日本にこういう人がいたのか」と初めてこの言葉を知ったときの眩しいような驚きと喜びの気持ちは忘れられない。

その『青鞜』は日本で初めて、女性の手になる女性のための雑誌であった。長い長い抑圧された女性の地位に、押さえきれない想いを抱いていた女性たちにとって、『青鞜』の誕生はどれほどの喜びであったろうか。当時の女性作家はみんな『青鞜』に集い、思いのたけを綴った。女に対する抑圧をはねかえし、自己の思いや悩みを正直に表現しようとした彼女たちの語りは驚くほど率直であり真剣である。

このような先駆者のおかげで、今や政府が男女共同参画社会を提唱する時代となっているが、それでも、日本の社会にはまだまだ女性に対する差別と偏見があって、女性の地位は外国に比べると低い。『青鞜』の時代に体制からも世間からも反発されながら、ひるまずに自らの信念を吐露し、一人の人間として生きとおそうとした女性たちの代表的な著書を復刻したこの叢書は、本当の男女共同参画社会を築こうとする私たちの力になる。

『青鞜』の時代を実感する復刻

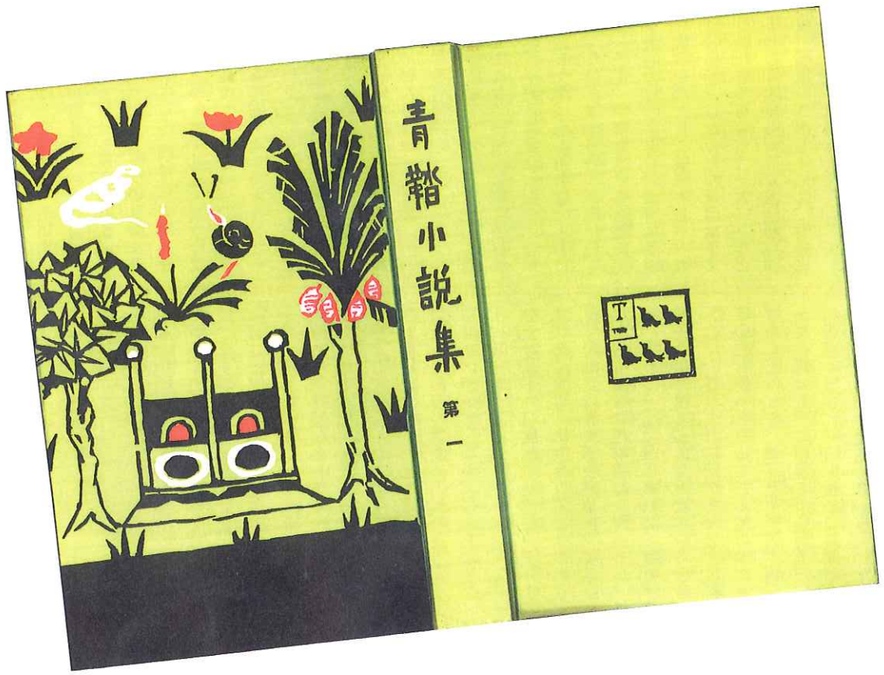
米田佐代子（女性史研究者）

「ジェンダー」とか「セクシュアリティ」といえば最近の流行語のようにみる向きもあるが、そのような用語も存在しなかった一九一〇年代の日本で、女性たち自身がこうしたテーマに挑み、熱く論争したのが『青鞜』であった。

しかもその担い手は、平塚らいてうや伊藤野枝のように今も知られている女性ばかりではなかった。女性の経済的自立を説いた岩野清、共働き生活を「殺風景」と認めつつなおそこに「一種の快感」を見出した加藤みどり、人妻の恋（当時は姦通罪）を大胆にえがいて発禁に問われた荒木郁、妻は夫の浮気を耐えるものという〝常識〟に反逆した生田花世、そして教師として教壇に立ちつつ「良妻賢母批判」の論陣を張った上野葉子など、今日読んでもはっとするほど新鮮な問題提起者が少なくない。

本叢書は、埋もれがちであった『青鞜』の多彩な女性像を現代によみがえらせる好企画である。装丁まで忠実に復刻されていることは興味深い。たとえば若くして病没した上野葉子の遺稿集『葉子全集』（全二冊）は夫の上野七夫によって編まれたものだが、変形ビロード張りの凝った表紙に妻の死を悼む思いがにじみ出ている。エリートの海軍士官であった彼は、生前「女に『男の厄介にはならぬ』と云ふだけの決心が欲しい」と言い放った葉子をとがめるどころか「日々涙し」と書いて哀惜し、このようなかたちで記録したのであった。大正デモクラシー期が「新しい女」の時代であったとすれば、それはまた「新しい男」の可能性を拓いた時代でもあったように思われる。

『青鞜』の時代をさまざまな角度から実感し得るシリーズとして、再版を喜びたい。



『青鞜』叢書 内容紹介 の女たち

長谷川時雨『美人伝』

●**美人伝**　一九一八（大正七）年六月刊。東京社発行。扉短歌・与謝野晶子、吉井勇。
女流作家として生前華やかな存在であった長谷川時雨が遺した仕事のひとつである女性評伝シリーズの最初のもので、明治期を中心に五二人の女性を登場させている。時雨自身もたびたび寄稿した『青鞜』や当時の活発な女性解放の動きからすれば、女性の社会的制約ゆえの苦しみや悲しみを描いた筆致は、やや微温的ともいえるきらいもあるが、貞女烈婦の紋切り型でなく、名流婦人も芸人も市井の女性も区別なくとりあげ、女の立場から愛情をこめて書かれた女性の評伝として先駆的である。
＜**内容**＞九條武子／筑紫の白蓮／辰巳屋のおひな／芹影女史／石上露子／日向きん子／秋月尼／鴻池福子／大塚楠緒子／山川登美子／阪東玉三郎　ほか全五二編。
●**長谷川時雨**（はせがわしぐれ）　本名・ヤス。一八七九（明治一二）年、東京日本橋に生まれる。一八九七年、金持の道楽息子との結婚を強いられたが、夫の留守を幸いに自由な読書時間をもつことができ、一九〇一年、『女学世界』に小説を発表、文壇に出る。翌年夫と別れ、以後、次第に小説から演劇に心を移し、脚本作者として脚光を浴びることとなる。のちに大衆作家として人気を集めた文学青年・三上於菟吉と同棲。一九二八年、三上の援助によって女性文芸雑誌『女人芸術』を創刊。『青鞜』によって端緒を開かれた女性文学が花開く場を提供した。
一九四一年没。六一歳。
●解説＝和泉あき（相模女子大学名誉教授）

水野仙子『水野仙子集』

●**水野仙子集**　一九二〇（大正九）年五月刊。叢文閣発行。編紺・川浪道三。題字・尾上柴舟。序文・田山花袋。跋文・有島武郎。装幀・岸田劉生。彫刻・井上凡骨。
早逝してその才能を惜しまれた自然主義文学作家・水野仙子唯一の著作集。仙子は『青鞜』同人の中でも実力派として知られ、昨今再び注目を集めている。本書は夫・川浪道三が、田山花袋と有島武郎の助けを得て明治四二年から大正八年までに新聞・雑誌で発表された作品のうち約三分の一を選び、仙子の一周忌に出版したもの。
＜**内容**＞酔ひたる商人／沈みゆく日／お三輪／白い雌鶏の行方／輝ける朝／嘘をつく日／道／十六になつたお京／一樹の蔭／淋しい二人／熱／夜の浪／女／神楽坂の半襟／女医の話　ほか全二二編及び水野仙子年譜
●**水野仙子**（みずのせんこ）　本名・服部てい子。一八八八（明治二一）年、福島県に生まれる。兄は歌人・服部躬治。一九〇五年須賀川裁縫専修学校卒業。早くから『少女界』『女子文壇』などに投稿する。一九〇九年『文章世界』に掲載された「徒労」が田山花袋の注目するところとなり、上京、永代美知代や今井邦子との共同生活をしながら文筆に励む。一九一一年同じ花袋門下の川浪道三と結婚。同年『青鞜』の社員となる。以後、同誌のほか『新潮』『中央公論』などを舞台に多くの作品を発表、田村俊子・素木しづらとともに新進女性作家の一人に数えられる。一九一五年、読売新聞社の記者となり、身上相談欄を担当して活躍するが、翌年肋膜炎をわずらい郷里に帰って静養。一九一九年、転地先にて死亡。三〇歳。
●解説＝尾形明子（東京女学館大学教授）

山田わか『女・人・母』

●**女・人・母**　一九一九（大正八）年一二月刊。森江書店発行。
『青鞜』でデビューした評論家・山田わかの最初の著作集。折りしもらいてう、菊栄、晶子との母性保護論争が繰りひろげられた直後の出版であり、論争の中では比較的穏健派といわれるわかの、母性保護、〝家庭の愛〟尊重の姿勢がはっきり打ちだされた論文集となっている。
＜**内容**＞家庭の危機／母性保護問題／婦人問題解決の道程としての社会保険／現代婦人職業問題／今後の婦人問題を提唱す／婦人を惑はす婦人論／経済的独立が男女関係を解決するか／文明の新基礎としての家庭／女、人、母／恋と操の社会的影響／所謂理想の女／産児数は理想のみを以て解決するを得ず／一般婦人の政治的自覚を俟つ　ほか全二五編
●**山田わか**（やまだわか）　一八七九（明治一二）年、神奈川県三浦郡に生まれる。家の没落によって意にそわない結婚を強いられた上、単身、出稼ぎのため渡米する。渡米先のシアトルでは、娼家で働いていたが、脱出と逃亡を重ね、娼婦の救出・更生施設であるキャメロンハウスに駆け込む。その後、山田嘉吉の開く私塾で学び、嘉吉と結婚、一九〇六年夫婦で帰国する。一九一三年、『青鞜』にシュライネルの翻訳を発表。以後、母性主義思想に根ざした論を展開する論客として活躍、一九一八―一九年の母性保護論争でも家庭尊重と母性保護の立場をとる。一九二〇年雑誌『婦人と新社会』を刊行。一九三一年からは『東京朝日新聞』の「女性相談」欄回答者を担当。戦後は幡ヶ谷女子学園を経営した。
一九五七年没。七七歳。
●解説＝香内信子（近代文学研究者）

田村俊子『木乃伊の口紅』

●**木乃伊の口紅**　一九一四（大正三）年六月刊。牧民社発行。装幀・朝倉文夫。
明治末期の文壇で、樋口一葉以来の一流の女流作家といわれた田村俊子の絶頂期の作品集。
「あきらめ」が懸賞に当選する前の、窮乏し、すさんだ松魚との結婚生活を描き、生々しいほどのエロティシズムに溢れた「木乃伊の口紅」、俊子と俊子の若い愛人と夫との三角関係を題材とした「炮烙の刑」の二つの代表作等を所収。
＜**内容**＞木乃伊の口紅／緑の朝／憂鬱な匂ひ／時雨の朝／ぬるい涙／炮烙の刑
●**田村俊子**（たむらしゅんこ）　旧姓、別姓・佐藤。一八八四（明治一七）年、東京浅草蔵前に生まれる。日本女子大学校国文学部を中退、一九〇二年幸田露伴に師事し小説を発表しはじめる。同門の田村松魚と恋愛、渡米する松魚と結婚を約し七年間待つ。その間、女性としての近代的自我に目覚め、次第に露伴から離れ、小説を書くかたわら、舞台にも出演する。一九〇九年帰国した松魚と結婚。一九一一年に懸賞小説「あきらめ」が一等当選、以後「木乃伊の口紅」「炮烙の刑」など自然主義の濃い作品を次々に発表、文壇の寵児となる。一九一七年新聞人・鈴木悦と恋愛関係に入り、翌年悦を追ってバンクーバーへ渡る。以後、正式に結婚し、日本人労働者の組合活動を啓蒙指導する夫と、一八年間過ごす。帰国後、夫を病気で失ったのち戦時下の中国にわたり、女性雑誌『女声』を刊行、一九四五年客死。六〇歳。
●解説＝瀬戸内寂聴（作家）

『青鞜』叢書 内容紹介 の女たち

山川菊栄『婦人問題と婦人運動』

●**婦人問題と婦人運動**　一九二五（大正一四）年。七月刊。文化学会出版部発行。安部磯雄・山川均・堺利彦の共編による「社会問題叢書」の第八編。
本書は、日本の女性解放史における最高の理論家・山川菊栄の数多くの著書の中でも、戦前の社会主義女性論の一つの到達点を示すもの。内容は、赤瀾会設立後の女性運動の状況を反映して、社会主義女性論を体系的に紹介し、その優位性を説きつつ、いわゆるブルジョア女性解放論を批判するものとなっている。
なお、本書は、『山川菊栄集』（岩波書店刊、一九八一～二年）には所収されていない。
＜**内容**＞男性中心説と女性中心説／原始女性の地域／文明社会の男女関係／婦人解放論と其批評／婦人の地位の改善／二つの指導的精神
●**山川菊栄**（やまかわきくえ）　旧姓森田、一時青山姓。一八九〇（明治二三）年、東京で生まれる。一九一二年女子英学塾を卒業。一九一五年、平民社講演会に出席。翌年二月の同会例会に出席した際、他の出席者とともに検束され、一夜留置。このとき知り合った山川均と同年秋結婚。同じくこの年、伊藤野枝の廃娼運動批判に対し批判の文章を『青鞜』に寄せ、論壇に登場。以後社会主義女性解放論を華々しく展開する。一九一八年にはらいてう、晶子、わかの母性保護論争に参加、鮮やかな切りさばきを見せた。一九二一年には堺真柄、伊藤野枝らと日本最初の社会主義婦人団体「赤瀾会」を結成。戦後一九四七年には、労働省婦人少年局長に就任し、四年間勤める。
一九八〇年没。八九歳。
●解説＝鈴木裕子（女性史研究家）

上野葉子『葉子全集』全二冊

●**葉子全集**　一九二八（昭和三）年一〇月（第二巻）・一一月（第一巻）刊。全二巻。編集・上野七夫。寄文・林久男、園頼三、金子白夢、上田君子、成瀬無極。序・与謝野寛、与謝野晶子。
上野葉子は『青鞜』同人のなかでも地味な存在ではあるが、確かな批評眼をもって評論や小説を発表していた実力派。一九二八年七月若くして病没。本書は、葉子の没後、百箇日にあたる一〇月二四日に『大阪朝日新聞』の懸賞小説に応募したことのある長編小説「雑音の中より」を『葉子全集』第二巻として、入院して一年目にあたる一一月二八日に諸雑誌に発表された短編及び短歌、病中雑感を集めたものを第一巻として刊行したもの。
＜**内容**＞彼女のことども（略歴）／病中雑感／婦人問題と文部省の態度／人形の家より女性問題へ／「性」について　ほか（以上第一巻）／雑音の中より（第二巻）
●**上野葉子**（うえのようこ）　旧姓名・稲葉てつ。一八八六（明治一九）年、大垣市に生まれる。大垣町立興文尋常小学校、同町立高等女学校卒業後、岐阜県安八郡六街尋常小学校高等科代用教員を勤めるが、母親の反対を押し切って一九〇四年東京女子師範学校に入学、卒業後は福井県立福井高等女学校で教鞭を執る。一九一〇年上野七夫と結婚。その後も佐世保で高等女学校の教師をつとめるなど多忙の中にあっても筆を捨てることはなく、雑誌『青鞜』『反響』などに評論・小説を寄せる。この頃てつを葉子と改名。一九二七年病魔に冒され、同年暮れ、療養のため興津に転地する。一九二八年没。四二歳。
●解説＝渡邊澄子（大東文化大学名誉教授）

『青鞜』叢書 内容紹介 の女たち

木村駒子ほか『新らしき女の行くべき道』

写真は木村駒子

●**新らしき女の行くべき道**　一九一三（大正二）年四月刊。洛陽堂発行。
『青鞜』の出現による刺激と『青鞜』を『青鞜』たらしめた時代の空気によって生まれた女たちの新しい運動のひとつ、「新真婦人会」の主要メンバーによる共著。『青鞜』をめぐるジャーナリズムを明らかに意識しつつ彼女たち独自の女性論を展開している。
＜**内容**＞新真婦人会の目的／新らしい女と良妻賢母／結婚論／婦人の自由／婦人に対する希望／男子に対する希望／社会に対する希望（以上西川文子）／現代婦人の特長／神秘家の内的生活（以上木村駒子）／女性の解決（宮崎光子）
●**西川文子**　『婦人解放論』の項、参照。
●**木村駒子**（きむらこまこ）　旧姓・黒瀬。一八八七（明治二〇）年、熊本県に生まれる。熊本女学校に編入学、さらに福岡英和女学校、青山女学院に入学するが、女優になろうとして退学。木村秀雄と恋愛、周囲の反対をおし切って同棲、出産。この頃、『熊本評論』に寄稿する。上京後、夫とともに観自在宗の布教につとめ、新真婦人会で活躍のあとは、浅草の金龍館で女優として、アメリカでは舞踊家として出演。また、戦中戦後を通じて舞踊を教えて自活する。
一九八〇年没。九二歳。
●**宮崎光子**（みやざきみつこ）　一八八五（明治一八）年、福岡県に生まれる。一九〇一年、跡見女学校へ入学するが、病気と経済的理由によってまもなく退学。宮崎虎之助の著書に出会い、熱烈な信者となり、やがて虎之助と結婚。夫を予言者と仰ぎ、ともに布教に歩くが、一九一六年病死。三〇歳。
●解説＝石原通子（家族史研究会会員）

西川文子『婦人解放論』

●**婦人解放論**　一九一四（大正三）年二月刊。中央書院発行。序歌・高安月効、内ケ崎作三郎、小口みち子。序・高島平三郎、与謝野晶子、日向きむ、高島米峰、江木衷、高野重三。
西川文子生前の著書（共著は除く）としては、唯一のもの。もともと平民社で社会主義女性解放論に触れ、女性の政治参加の権利を求める活動を積極的に行なっていた文子が、夫・西川光二郎との再婚後しばらく社会的活動を控えていた後運動を再開したのが、宮崎光子、木村駒子らと始めた「婦人雄弁会」であった。同会は翌年「新真婦人会」へと発展し、当初文学雑誌を標榜した『青鞜』とは違った、啓発的婦人解放運動の実践をめざした。翌年文子の解放思想を表わすものとして出版されたのが本書である。
＜**内容**＞婦人の自覚／性慾問題／男女交際論／結婚論／夫婦論／母と子／独身論／婦人と社会／不品行亡国論／運命論
●**西川文子**（にしかわふみこ）　旧姓・志知。一八八二（明治一五）年、岐阜県安八郡に生まれる。京都府女学校の卒業直前の一九〇二年、鉱毒問題演説会にて社会主義詩人・松岡荒村と相識り、同年結婚。一九〇四年、荒村の急逝後、堺利彦を訪ねて平民社に入社。翌年堺為子、寺木みち子、神川松子らと女性の政治結社加盟の自由を要求して治安警察法第五条撤廃議会請願運動を実行、同年西川光二郎と再婚。一九一三年、青鞜社に対応して、宮崎光子、木村駒子らとともに「新真婦人会」を発足させ『新真婦人』誌を創刊。一九二五年「婦人参政同盟」を結成、らいてう、市川房枝などとも協力して婦人参政権実現のため活動した。
一九六〇年没。七九歳。
●解説＝天野茂（日本近代文学研究家）

中平文子『女のくせに』

●**女のくせに**　一九一六（大正五）年一二月刊。やなぎや書房発行。装幀・栗原玉葉。挿画・下川凹天。中平文子は、『中央新聞』記者時代に、記者であることを隠し、変装してあちこちにもぐりこんでルポルタージュを発表する「化け込み」が当たって、一躍ジャーナリズム界にその名を知らしめた女性ジャーナリストであるが、政友会代議士でもある『中央新聞』社重役とのスキャンダル、そして彼との交情の顚末を暴露した手記で逆にジャーナリズム界を追われた。本書は男中心の社会の中で翻弄されながら、その矛盾と果敢に闘った文子が「化け込み」時代の感想を集めて出版したもの。

＜**内容**＞新聞記者になりそこねの記／ぶろーくん、はーと／蛇の家の訪問／独逸大使館の秘密室／革命情話／尼寺の輿論／探偵の入門／かゝる誘惑　ほか全一二編

●**中平文子**　一八八八（明治二一）年、愛媛県松山に生まれる。京都府立第一高女卒業後、見合い結婚をするが、平凡な小市民的生活にあきたらず、五年後結婚を解消し、一九一三年、放浪の末、『中央新聞』に入社、「化け込み」記者として大活躍するが、愛人とのスキャンダルによって失脚し、退社後、傷心を愈すために行った京都の寺で禅学青年と知り合い、結婚するが失敗、中国大陸に渡り、作家の武林無想庵と結ばれ、渡仏して洋裁技術を身につけ帰国、デザイナーとして活躍する。再び渡仏後、愛人に撃たれるという「モンテカルロ・スキャンダル」ののちに無想庵とも別れ、ベルギー在住の貿易商と結婚し、死ぬまで連れ添う。晩年は再び文筆業に携わる。一九六六年没。七八歳。

●解説＝江刺昭子（評伝作家）

松井須磨子『牡丹刷毛』

●**牡丹刷毛**　一九一四（大正三）年七月刊。新潮社発行。序・島村抱月。近代演劇の女王ともいうべき女優・松井須磨子の遺した唯一の著書。『青鞜』誌上でも大いに論議されたイプセン作「人形の家」のノラを演じ、「新しい女」のシンボルでもあった須磨子は、誇り高い女優であり、実生活でも抱月との愛を貫く自由恋愛実行者であった。また芸術と文芸を愛した彼女は折折感想をしたためて女性雑誌などに寄稿していた。本書は『青鞜』同人とは違ったタイプの「新しい女」である須磨子の随筆集である。

＜**内容**＞蝶蝶／幼い涙／母衣／私の故郷／京の夏／思ひ出日記／人形の家の思出／最近の不平／ノラとマグダ／大阪の五夫人／文楽の鮨屋　ほか全一七編

●**松井須磨子**　本名・小林正子。一八八六（明治一九）年長野県埴科郡に生まれる。一九〇一年上京、戸板裁縫女学校へ通いながら鳳月堂で働く。一九〇七年結婚するが、道楽者の夫に性病をうつされた上、離縁される。療養後、同郷の高等師範学校の学生と結婚、夫の知人関係から、一九〇九年坪内逍遙の文芸協会演劇研究所の第一回研究生となる。しかし演劇に熱心なあまり結婚生活に破綻をきたし、離婚。一九一一年公演の「ハムレット」オフェリア役、「人形の家」ノラ役で大好評を得、女優としての地位はゆるぎないものとなる。一方島村抱月との恋愛関係が原因で逍遙により退学を余儀なくされた須磨子は、抱月とともに芸術座を興す。第三回公演の「復活」（カチューシャ）で圧倒的成功をおさめ、大きな飛躍を期待された矢先の一九一八年一一月、抱月は急死し、翌一九一九年一月、須磨子も自殺。三二歳。

●解説＝松本克平（近代演劇史研究家・故人）

●**未亡人論**　一九一三（大正一二）年三月刊。文化生活研究会発行。

『青鞜』と同時代の自覚的女性ともいうべき作家・三宅やす子の評論集。「貞女両夫に見えず」として無視されてきた「未亡人問題」に正面からとりくみ、女自身も自分の行くべき道をはっきりつかむべきだ、と自分自身若くして夫を失った経験に基づいて「未亡人論」を論じる。婚約から夫との死別までの結婚生活をふりかえって綴った「自叙伝の一節」も所収。

＜**内容**＞未亡人論／夫婦生活中の愛と憎みの心理／女性が持つ特殊の愛／女性の要望する男性改造／結婚せんとする男女に送る／現代の婦人／母として生きむが為に／自叙伝の一節　ほか全一二編

●**三宅やす子**　一八九〇（明治二三）年、京都市に生まれる。お茶の水高女在学中から『女子文壇』に投稿し、編集主事の河井酔茗に認められる。一九一〇年、三宅雪嶺の甥にあたる昆虫学者・三宅恒方と結婚。恒方は妻の才能を伸ばすことに協力を惜しまず、彼の労によってやす子は夏目漱石に弟子入りをした。一九二〇年、初めて『神戸新聞』に連載小説を発表。翌年恒方死去。三一歳で若き「未亡人」となったやす子は、文筆で立つことを決意。評論、小説、講演、社会活動等、多方面に啓発的な立場から活躍する。社会的視野に欠け、通俗小説の域を出ていないとされながらも、夫を失って以後、ひとりで世間に立ち向かい、多くの恋愛も経験したことから、自己にめざめかつ自立と真の愛を求める女性をその作品の中で描いており、その点からも先駆的女性のひとりといえる。

一九三二年没。四一歳。

●解説＝和泉あき（相模女子大学名誉教授）

三宅やす子『未亡人論』

『青鞜』叢書の女たち　内容紹介

●**悲しき配分**　一九二二（大正一一）年一二月刊。新潮社発行。序・島崎藤村。装幀・埴原久和代。

らいてうや宮本百合子とも親交の深かった「主婦作家」の草分けともいえる鷹野つぎの最初の著書。夫婦の日常生活における心のひだを、冷静かつ細やかなタッチで描くことを特徴とした、つぎの作風がよくあらわれている。

＜**内容**＞悲しき配分／ある母と児／片翼の飾り／撲たれる女／顔／楽園／暑苦しい夜／一つの亡滅／焼けあと／酬いるもの／黄昏／新しき傷痕　ほか全一五編

●**鷹野つぎ**　一八九〇（明治二三）年、静岡県浜松市に生まれる。旧姓名・岸次。浜松高等女学校卒業後、静岡市の県立静岡高女補修科に進んだが一学期で帰郷、『遠江新聞』記者・鷹野弥三郎と出会い、恋に陥ちた。しかし父が許さないため出奔、俳人で報徳運動家の松島十湖の養女となって結婚をはたした。一九一七年、夫の転任で東京に移り、文筆活動に入る。一九二〇年「撲たれる女」を発表、折から婦人月刊誌『処女地』発刊を企てる島崎藤村と会い、同誌の主力同人として活動。一九二二年、短編集『悲しき配分』（新潮社）を出版した。評論に創作に活発な活動も束の間、夫は失職、自身は結核におかれる。その間八人の子供を得ながら六人に先立たれるなど、家庭の不幸に見舞われながらも女性の進出のためペンを執り続けた。

一九四三年没。五三歳。

●解説＝市原正恵（静岡県近代史研究会会員）

鷹野つぎ『悲しき配分』

『青鞜』叢書の女たち　略年表

一九〇〇～二八年

一九〇〇年（明治33）—社会主義協会結成
　〇一　—愛国婦人会設立
　〇三　—『婦女新聞』創刊
　〇四　—日露戦争勃発、非戦論おこる
　〇五　—治安警察法第五条改正の願書を衆議院に提出
　〇七　—『世界婦人』創刊
　〇八　—赤旗事件
一九一〇年—大逆事件。売文社設立
一一　—『人形の家』公演　管野スガ刑死
一九一三（大正2）—「新しい女」論議おこる
一四　—第一次世界大戦勃発
一五　—貞操論争おこる
一六　—葉山日蔭茶屋事件
一七　—ロシア革命始まる
一八　—シベリア出兵、米騒動　母性保護論争おこる
一九　—『我等』『改造』『解放』創刊
一九二〇年
二一　—赤瀾会結成
二二　—白蓮事件
　日本共産党結成
二三　—関東大震災。甘粕事件により伊藤野枝虐殺
二四　—婦人参政権獲得期成同盟会発足
二五　—治安維持法公布
二七　—『女性同盟』創刊
二八　—『種蒔く人』創刊
　—『女性改造』『処女地』創刊
　—『ウーマンカレント』創刊
　—『産児調節評論』（のち『性と社会』に改題）創刊
　—『婦選』創刊
　—『女人芸術』創刊

一九一一年—『青鞜』創刊
　—『青鞜』創刊
一九一三（大正2）—『新真婦人』創刊
一四　—『番紅花』創刊
　『反響』創刊
一五　—『ビアトリス』『婦人公論』創刊
一七　—『主婦之友』創刊
一八　—『文明批評』創刊
一九　—『女子文壇』『婦女新聞』創刊
　—『日出』『平民新聞』創刊
　—『アララギ』創刊
一九二〇年—『女子文壇』『婦人公論』創刊
二一　—『女子文壇』『婦人公論』創刊
二二　—『女子文壇』『婦人公論』創刊
二三　—『女子文壇』『婦人公論』創刊
二四　—『女子文壇』『婦人公論』創刊
二五　—『女子文壇』『婦人公論』創刊
二七　—『女子文壇』『婦人公論』創刊
二八　—『女子文壇』『婦人公論』創刊

女子文壇

『女子文壇』は一九〇五（明治三八）年に創刊された。日本最初の女性文学雑誌でありフェミニスト雑誌となった『青鞜』に先立つこと六年、二〇世紀初頭の若い女性たちの自己表現への渇望を存分に汲み上げた投稿雑誌である。編集は野口竹次郎と河井酔茗。

『女子文壇』を出発点として文壇に登場した女性は数多い。良く知られるのは水野仙子・今井邦子・生田花世・原阿佐緒・若山喜志子・原田琴子らで、ほかに尾崎翠・三ケ島葭子・鷹野つぎ・島本久恵・三宅やす子などもここから巣立っていった。

このように女性たちにとって「文壇への登竜門」であったと同時に数少ない表現の場として大きな役割を果たしたことも見逃せない。『女子文壇』に集った女性たちのなかから神近市子・中平文子・九津見房子など必ずしも文学への道を選ばずに社会に影響を与えた者も多く輩出している。

大正デモクラシー前夜に開花した一〇代の女性たちのマグマのような熱い思いがあふれる本誌は、女性文化の原点ともいうべき多くの可能性を秘めた資料である。名のみ高く、その実態がほとんど明らかになっていない本誌を復刻し、文学研究のみならず、近代教育史、女性史、女性文化史研究に寄与するものである。

○全54巻・別冊1
○明治38年→大正2年刊
○別冊＝解説・渡邊澄子、総目次、索引
○揃定価＝本体九九万円＋税
○'02年6月～'05年8月配本完結（復刻版）

不二出版＝関連図書案内
復刻版

叢書『青鞜』の女たち――刊行概要

- 体裁――全二十巻・総二十一冊
  菊半判・四六判・菊判／並製・上製
- 頁数――総八、〇〇〇頁（全巻に解説を付す）
- 揃定価――本体一五〇、〇〇〇円＋税

ISBN4-8350-5210-2

平塚らいてう『円窓より』
伊藤野枝『乞食の名誉』
与謝野晶子『激動の中を行く』
岩野清『愛の争闘』

生田花世『燃ゆる頭』
荒木郁『火の娘』
青鞜社同人『青鞜小説集』
神近市子『引かれものの唄』

長谷川時雨『美人伝』
水野仙子『水野仙子集』
山川菊栄『婦人問題と婦人運動』
上野葉子『葉子全集』全二冊

山田わか『女・人・母』
田村俊子『木乃伊の口紅』
木村駒子ほか『新らしき女の行くべき道』
西川文子『婦人解放論』

中平文子『女のくせに』
松井須磨子『牡丹刷毛』
三宅やす子『未亡人論』
鷹野つぎ『悲しき配分』

不二出版
東京都文京区向丘一―二―一二
郵便番号一一三―〇〇二三
電話〇三―三八一二―四四三三
郵便振替〇〇一六〇―二―九四〇八四

2005.4〔改〕